

# 經濟論叢

第九十三卷 第一號

---

インフレーションの財政金融的条件……………島 恭 彦 1

ライン・ヴェストファーレン製鉄業に  
おける『混合企業』の創出 (二)……………大 野 英 二 24

国家の經濟的力能に関する  
古典的命題 (一)……………池 上 惇 38

景気分析への道……………永 友 育 雄 55

## 書 評

R・パートルズ「マーケティング思想の発展」……橋 本 勲 73

經濟論叢 第九十一卷・第九十二卷 総目録

---

昭和三十九年一月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## 國家の經濟的力能に關する古典的命題

——産業資本主義段階—— (一)

池 上 惇

經濟学における國家の範疇を解明するためにわが國の經濟理論家がどのような態度をとつたかについては、前章で言及した通りであるが、土台と上部構造との相互規定性の中で經濟学における國家の範疇をとらえようとする立場からすれば、まず第一に、資本主義的生産關係から不可避的に生み出される諸矛盾の總体を把握し、第二に、この諸矛盾の總体に対応してどのような性格の國家權力が、どのような干渉を經濟過程にたいしておこなうか、が研究されなければならない。そして、最後に、この干渉の結果として、資本主義的諸矛盾がどのような方向に發展してゆくか、があきらかにされるべきである。

國家は階級社會の非和解性の産物であるとするならば、資本主義社會の「非和解性」を規定する根本的な矛盾とそこから派生する矛盾の總体を把握することはこの小論の第一の課題である。つぎに、資本主義的基本矛盾によって規定された資本主義的國家權力の特色と、この國家權力の經濟過程への干渉の性格があきらかにされ、最後に、資本主義的諸矛盾に及ぼす國家の經濟的可能的影響が問題とされる。このように、矛盾の總体——反作用の性格——矛盾への影響、という考察の方法によって、産業資本主義の總運動と國家の經濟的力能を把握しようとする試みは、

宇野経済学における原理論——段階論——現状分析という接近方法や、生産力の発展に対する生産関係の「適応」という社会化論の方法に明確に対立するものであるが、この小論ではマルクス経済学の古典的労作を指針として、一応の整理を志してみたいと思う。

## 第一節 エンゲルスによる矛盾の総体の把握

A・スマスは、彼の経費論において、軍事費、司法費、土木工事、公共施設費、などの発生する原因を考察しているが、彼がここで認識している資本主義社会の矛盾とは、第一に、国家間の対立と、私有財産の保護、すなわちブルジョアジーとプロレタリアートの対立、および、資本の増殖欲と発展水準との間の矛盾などである。これらの諸矛盾は、いずれも、資本主義社会の相反する傾向の重要な一面をついてはいるが、決して、より根本的な矛盾との関係において説かれなかつたところに、彼の国家の経済的機能研究の限界があつたといわなければならぬ。

「これらの経済学者にとっては、新しい科学は、彼らの時代の諸関係や欲求を表現したものでなく、永遠の理性の表現であつた。彼らが発見した生産と交換との諸法則は、これらの活動の歴史的に規定された一形態の法則ではなくて、永遠の自然法則であつた。」<sup>1)</sup>のである。

スマスの把握した矛盾の個々の断片は、資本主義社会という特殊な社会のもつ基本的な矛盾から派生する特殊な矛盾の総体の中で適切な位置づけを是非ともあたえられねばならなかつたのであつて、これを定式化する最初の試みは、エンゲルスによつてなされている。

彼は資本主義社会の基本矛盾について明瞭に次のように述べる。

「……資本主義革命——まず單純協業とマニユファクチュアとによる工業の改造。これまで分散していた生産手段が大きな仕事場に集積され、それにもなつて、それは個々人の生産手段から社会的生産手段に転化する——この転化は大体において交換形態には影響しない。古くからの取得形態はそのままおこなわれる。資本家があらわれる。資本家は、生産手段の所有者としての資格で、生産物をも取得し、それを商品とする。生産は社会的行為となつてゐるが、交換と、それとともに取得とは、あいかわらず個別的行為であり、個々人の行為である。社会的生産物を個別的な資本家が取得する。これが基本的な矛盾であつて、そこからして、今日の社会がそれを通じて運動しているいっさいの矛盾がうまれる。大工業がこれらの矛盾をあかるみにだす。」

エンゲルスはこの指摘によつて、生産手段の資本主義的所有という前提のもとでは、生産の社会的性格の發展は、交換及び取得の個別的性格と矛盾せざるを得ないことを述べているのであるが、この基本的矛盾が、大工業の發展の中で、どのように多様な矛盾としてあらわれるか、に言及して、つぎの四つの矛盾をあげている。

A 「生産者が生産手段から分離する。労働者は終身賃労働をはたす運命にさだめられる。プロレタリアートとブルジョアジーとの対立。」

B 「商品生産を支配する諸法則がますます表面にあらわれ、その作用がますますつよまる。無拘束な競争戦。個々の工場内における社会的組織と社会における全体としての生産の無政府状態との矛盾。」

C 競争による機械の改良とそれにもなう産業予備軍の増大、他面での生産力の未曾有の發展、恐慌、「こちらには生産手段と生産物との過剰、——あちらには仕事も生活資料ももたない労働者の過剰、という悪循環。

しかし、生産と社会的福祉とのこの二つのでこはむすびつくことができな。なぜなら、

資本主義的な生産形態は、生産力と生産物がまゑもつて資本に転化していかざり、生産力をもはたかせず、生産物をも流通させないからである。ところが、ほかならぬ生産力と生産物そのものの過剰が、それらの資本への転化をさまたげるのである。この矛盾はたかまつて、生産様式が交換形態に、反逆する、という背理になる。ブルジョアジーにはこれ以上彼ら自身の社会的生産力を管理する能力がないことが、確認される。」

D 「資本家自身が生産力の社会的性格を部分的に承認することをよぎなくされる。大規模な生産および交通の機構が、はじめは株式会社によつて、のちにはトラストによつて、そのつぎには国家によつて、取得される。ブルジョアジーはよけいな階級であることがあきらかになる。彼らのいっさいの社会的機能は、いまでは雇い人である職員によつてはたされる。」

総括すれば生産の社会的性格と、生産物の交換及び取得の個別的な性格との間の矛盾は、

第一に、プロレタリアートとブルジョアジーの階級的対立として、

第二に、工場内部の生産の組織性と、社会全体の生産の無政府性の対立として、

第三に、生産の無制限的拡大と、労働者の過剰、資本主義的生産様式と交換形態との矛盾として、

第四に、資本家自身による、生産力の社会的性格の部分的承認としてあらわれる。

これらの諸矛盾が、国家の経済的機能にどのように反映するか、がつぎに考察すべき重要な論点であつて、ここでは諸矛盾の展開における相互依存の關係も問題にならざるを得ないであらう。

- (1) F. Engels, *Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft*, Dietz Verlag Berlin, 1954, S. 184. (邦訳「エンゲルス著、村田陽一訳、「反デューリング論」国民文庫版、第二冊、一九六二年、三〇三ページ)
- (2) *Ibid.*, SS. 352-353. (前掲書、四九一—四九二ページ)

## 第二節 国家の経済的力能

資本主義的諸矛盾の総体に対応する国家権力の経済的可能は、つぎの三つの範疇にわけることができる。

- (一) 階級対立に基因する権力機関そのものの維持のための経済的干渉
- (二) 諸矛盾を一時的に緩和し、資本主義的生産方法を改良するための経済的干渉
- (三) 資本主義的生産関係の発展につれて克服されるべき運命を持ちながら、その発展を補足する本源的蓄積的な国家の経済的力能

この三つの範疇は、相互に密接にからみあっているが、このからみ合いは、反作用の矛盾への影響を総括する際に言及しよう。

### (a) 権力機構の経済的基礎

資本主義的基本矛盾から派生する第一の矛盾、プロレタリアートとブルジョアジーの対立こそ、国家の経済的機能を理解する際の第一の前提である。

「近代国家は、どういう形態をとっているにせよ、本質上、資本家の機関であり、資本家の国家であり、観念上の総資本家である」

エンゲルスは、「反デューリング論」でこのように述べている。資本家階級の委員会としての資本主義国家は、産業資本主義の段階においては、また、産業資本家の委員会でもあった。すでに確立された資本主義的生産関係を維持するための暴力装置は、不生産的階級によって維持されねばならなかった。

ところが、この暴力装置の性格は、資本主義以前の社会におけるそれとは根本的な相違がみられたのであって、それ故にこそ、純粋に「不生産的」階級としての規定性をうけとるようになるのである。すなわち、生産力の発展の結果、原始共同体が解体しはじめ、階級的分裂がはじまると共同体の運営機能としての生産の管理者と、生産活動から疎外された権力機関との分離がはじまるのであるが、この分離は、資本主義以前の階級社会にあつては、不完全なものであつた。生産力の相対的低位性と共同体的規制によって特徴づけられるこれらの社会では、権力支配が、共同体から引きついで「社会の共同事務」——紛争の裁決、個々人の越権行為の抑制、道路その他交通手段、水利の管理など——と結びついており、国家が生産の指揮をとる大土木工事がおこなわれる。いわゆる「公的機能」が、経済的にも、階級支配の基礎の一つとなつたのである<sup>1)</sup>。しかし、資本主義的生産関係は、その基本矛盾の本性からして、最高度の生産力の発展と、一切の共同体的規制の廃棄にむかつてすすみ、一切の生産の指揮権を共同体から奪い去り、権威による社会的生産の統轄を根本的にくつがえしてしまふ。

「ひととは……権威が社会内分業を統轄することが少ければ少ないほど作業場内分業はますます発展し、そしてそれはますます個人の権威の支配下におかれるという一般的規則をうちたてることができる。だから作業場内の権威と社会内の権威とは分業に関しては相互に逆比例するのである。」（マルクス「哲学の貧困」）

社会的生産力の発展が工場内の組織性と、社会的無政府性の矛盾として展開すればするほど、国家権力は生産の管理からますます疎外され、ついには、恐慌によつてのみ、社会的生産は規制されるということになるのであつて、同時に、社会の共同事務をおこなう専門家の集団はもはや必要ではなく、生産力水準の発展は社会の全成員が社会の共同事務に参加しうる可能性をつくりだすまでに成長し、他方では、国家権力は、純粋の階級抑圧機関として、

「不生産的階級」として規定されることとなる。

この不生産階級の維持が、資本主義的蓄積過程にあたえる影響は、云うまでもなく

第一に浪費であり、資本蓄積への負担であり、第二に、課税、その他の強制力を持つ「独占」力であって、自由なる価格メカニズムを侵害する攪乱者である。

古典派経済学が必要悪として國家權力を擁護しつつ「夜警的」なることを要求するのはまさにこのためであって、經濟運営の中心は「自由な」資本家に移り、地域による國民の分割と、武装した兵士の集團を維持するための「經濟基礎の調達と不生産的階級の維持」を目的として、消極的に支持されることになる。だが、資本發展のもたらす諸矛盾は、更に「總資本家の委員会」である國家の經濟過程への干渉を不可避的ならしめるのであって、この点をつぎに述べなければならぬ。

(1) 以上の叙述については、拙稿「独占的支配と國家セクターの増大」(マルクス経済学講座第三卷 第二章、有斐閣、一九六三年)を参照。

いわゆる社会化論的國家独占資本主義論や、宇野派経済学においては、國家の經濟的機能の根本に、國家機關維持のための經濟的機能をおかずに、信用制度や、労働力の円滑な再生産のための國家の「改良的」干渉をもっとも本質的なものと考え、という特色がある。その理由は、資本主義社會の基本矛盾のとらえ方に由来するのであって、宇野経済学の場合には、本来商品となりえない労働力が商品化されるところに資本主義の基本矛盾をみるために、労働力の再生産を援助する國家の改良的機能だけに目がゆくことになるし、社会化論の場合には、生産力の性格に照応した生産關係が資本主義の枠内で生み出されるところに基本矛盾をみるわけであるから、生産の社会的性格の部分的承認、という側面に重点がゆくのは当然であって、信用制度や国有企業を國家の經濟的機能の根本とみなしてしまうのである。



(b) 資本主義的改良

一、プロレタリアートとブルジョアジーの階級的対立という条件の下で、工場内の組織性が、社会全体の生産の無政府性と深刻な矛盾に陥つたとすれば、それはどのような形での国家の経済過程への干渉をよびおこすのであろうか。また、その経済的作用はどのような方向に資本主義経済を發展させるであらうか。この問題は、マルクスによつて、二つの側面から考察されている。すなわち、工場内の組織性と社会全体の生産の無政府性との矛盾が労働者の上に及ぼす運命という側面と、この矛盾が、土地の上に及ぼす影響、という側面とである。

マルクスは云う。「資本制的生産は、同時にすべての富の源泉たる土地と労働者とを掘りくずすことによつて、社会的生産過程の技術および結合を發展させるにすぎない。」と。

まず、最初に労働者への資本制生産様式の影響と、それに対する国家権力の一定の反作用の側面から考察をはじめよう。

「近代的工業は機械・化学的処置・その他の方法によつて生産の技術的基礎とともに、労働者の機能および労働過程の社会的結合をたえず変革する。かくしてそれはまた、社会内分業をたえず変革し、一生産部門から他の生産部門へ多量の資本および労働者を間断なく移動させる。したがつて大工業の本性は、労働の転変・機能の流動・労働者の全面的可能性を条件づける。他方において大工業は、その資本制的形態において、旧式分業をその骨化した分立性とともに再生産する。すでに見たように、この絶対的な矛盾は、労働者の生活状態のあらゆる静止・固定・確実を止揚するのであつて、労働者の手から労働手段とともに絶えず生活手段をうち落し、彼の部分機能とともに彼自身を過剰ならしめようとする。またこの矛盾は、労働者階級のたえまない犠牲祭・労働力の際限もない浪費・

社会的無政府性の破壊作用において荒れまわる。これは消極的側面である。しかるに、労働の転変がいまや圧倒的自然法則として——いたるところで障碍にぶつかると一自然法則の盲目的・破壊的作用をもって——のみ行われるとすれば、大工業は自己の破局そのものによって、労働の転変したがって労働者のできるかぎりの多面性を一般的な社会的生産法則として承認しこの正常的表現に諸關係を適合させることを、死活問題たらしめる。<sup>2)</sup>

かくして、労働者の職業教育とその人格的發展の基礎は資本の仮借なき価値増殖欲望とともにあらわれ、また、同時に、工場立法は、家内労働の取り締りにおいて、旧米の家族關係を破壊し、新たな家族關係創出の前提をつくり上げる。<sup>3)</sup>

マルクスは、これら一連の反作用を総括してつぎのように云う。

「労働者階級の肉体的および精神的保護手段としての工場立法の一般化が不可避免的になったとすれば、それは他方では、すでに示唆したように、大きい社会的な規模の結合的労働過程への小規模な分散的労働過程の転形を、つまり資本の集積および工場体制の専制を一般化させ、促進する。

それ〔工場立法〕は、資本の支配をなご部分的に隠蔽している一切の古物的および過渡的形態を破壊し、それらの形態に置換えるに資本の直接的・公然的な支配を以てする。かくしてそれは、この支配にたいする直接的闘争をも一般化させる。それは、個々の作業場では斉一性、規則正しさ・秩序および節約を強要するのであるが、他方では、労働日の制限および取締りが技術に押しつける老大な刺戟によって、全体としての資本制的生産の無政府性および破局、労働の強度、ならびに、機械と労働者との競争を増加させる。

それは、小経営および家内労働の領域とともに『過剰人口』の最後の逃避場を、したがってまた全社会機構の従

来の安全弁を、破壊する。それは、生産過程の物質的諸条件および社会的結合とともに、生産過程の資本制的形態の諸矛盾および諸敵対を成熟させ、したがって同時に、新社会の形成的諸要素と旧社会の革命的諸契機とを成熟させる。」<sup>4)</sup>

工場立法は、資本制生産株式の發展期における国家権力の經濟的干渉の性格をもつとも典型的に示すものであるが、それにはつぎのような諸命題かふくまれている。

第一に、それは機械制大工業の一般化と資本の集積、集中の槓杆となる。

第二に、それは、前資本主義的要素を最終的に一掃する槓杆となる。

第三に、それは、階級対立を激化させ、擄取度を高め、企業内における生産の組織性と社会的生産無政府性との矛盾を激化させる。

第四に、それは、労働者の全人格的發展、新しい家族的結合の前提をつくりだし、社会主義社会建設の前提条件を整備する。

これらの諸特徴は、あらゆる改良的な国家の經濟的能力にはいずれも妥当するものである。

他方、富のもう一つの源泉である土地について、マルクスはいう。資本は「人間と土地との間の質料交換を、すなわち、人間により食料および衣料の形態で消費された土地諸成分の土地への復帰を、つまり、持続的な土地豊饒度の永久的自然条件を、攪乱する。

……だがそれは、同時に、かの質料交換の単に自然發生的に生じた状態を破壊することによって、その質料交換を社会的生産の規律的法則として・また人間の充分な發展に適當な形態において・体系的に再建することを、強制

する。」

従つて、資本は一方において労働力と土地の収奪によつて生産過程の技術と結合を發展させるとともに、他方では労働者の全人格的發展と、農業と工業のより新しい結合の基礎を準備せざるを得ない。それにもかかわらず、資本主義の枠内では労働力のたえざる搾取が不可避であるのと同じく、土地その他の自然資源に対する収奪の強化も不可避である。

都市と農村との対立、農業と工業の不均等發展こそはこの生産様式を特徴づける。

エンゲルスはいう。

「大工業は、ある程度までどこでもつくりだせる分子運動を技術上の目的で塊りの運動に転化させることを、われわれにおしえて、工業生産を場所的制限から大きく解放した。

水力は局地的であつたが、蒸気力は自由である。水力はかならず農村的であるが、蒸気力はけつしてかならずしも都市的ではない。蒸気力を主として都市に集積し、工場村を工場都市につくりかえるのは、蒸気力の資本主義的な利用の仕方である。

だが、そうすることによつて、それは同時にそれ自身の経営の諸条件をほりくずす。蒸気機関によつて第一の必要物であり、大工業のほとんどすべては必要物であるものは、比較的きれいな水である。ところが、工場都市は水という水を悪臭をはなつ汚水にかえてしまう。だから、都市への集積ということは、資本主義的生産の根本条件でありながら、それと同じ程度に、それぞれの産業資本家は、資本主義的生産によつて必然的につくりだされた大都市を去つて農村での経営にうつらうと、たえずつとめる。」

かくして資本主義の枠内における「都市計画」や「地域開発政策」などが、資本の要求として、必然的に生み出されてくるのであるが、この結果は、工業地帯と農業地帯の地域的較差を、ますます大規模に再生産しながら、都市への工業の集積をますます大規模に推進するにすぎない。運輸交通手段の発展は、この過程を国際的規模で達成させる。

標準労働日の設定が、究極的には資本の利益と一致するものでありながら、激烈な階級闘争を媒介したのと同じく、都市計画や地域問題も、都市住民や地域住民の要求、環境整備や、公衆衛生的見地からする運動を媒介として「改良」された。かかる「改良」は、労働者や市民の生活水準を一時的には上昇させるが、より大規模な資本の集積、集中の条件をつくり上げることによって、より一層大きな資本の支配力を達成させる。

〔注〕 資本による労働力と土地との収奪の反面は、社会的生産過程での技術および結合の発展である。製品、原料、工程の多様化は社会的分業を飛躍的に発展させ、地域間の分業の範囲を拡大させ、第一に鉄道を中心とする運輸業を、第二に、「労働者数の相対的減少のもとでの生産手段および生活手段の増加は、運河・ドック・トンネル・橋梁などのごとく、その生産物が遠い将来にしか実を結ばないような産業部門における労働の拡張を生ぜしめる。』（マルクス『資本論』青木文庫版⑦一七七ページ）これらの大量の固定資本を要し、利潤率が低く、個別資本の手には負えない部分は、国家がその運営を引きうけざるを得ない。（労働手段でない個人用住宅も、資本主義の初期にはその長い労働期間のため注文生産であった）

マルクスは云う。「資本制的生産が未発展な段階では、長い労働期間、したがって長時間にわたる大きな資本投下を必要とする企業は、殊にそれが大規模でのみ遂行されうる場合には、資本制的にはまったく経営されないことがある——たとえば、共同体または国家の費用で営まれる道路や運河など」（マルクス、前掲書、③三〇〇ページ）だが、このような国家の干渉は、信用制度と株式会社が発展するまでの過渡的な事態にすぎない。資本の集積が顕著になり、信用制度によって、他人の資本が結合さ

れ、巨大化するれば、國家のこの面での干渉は後景に退く。(マルクス、前掲書、⑥三〇一ページ参照)

二、經濟恐慌に対する資本主義國家の組織的干渉が体系化されるのは独占段階を待たなければならない。とくに、恐慌の克服が、植民地市場への進出による外延的発展によつてある程度保障されていた産業資本主義の段階においては、レッセ・フェールこそが最上の恐慌克服策とみなされ、恐慌による階級的矛盾の激化は資本主義体制をおびやかすほどには成長していなかつたのである。

三、資本家自身による生産力の社会的性格の部分的承認と國家の經濟過程への干渉の性格は、銀行制度および信用制度の確立の中に最も典型的な姿をみることが出来る。

以下、銀行信用制度と社会的簿記の形成に焦点をあわせながら考察をすすめよう。

近代的な銀行と信用制度の確立の意義は主としてつぎの点にある。

第一。高利の排撃と信用貨幣の創造によつて、前期的諸資本(商業資本や高利貸資本)の貴金屬独占を打破すること、

第二。株式会社の形成による結合資本家の創出により、資本の集積と集中の促進、すなわちマルクスによれば、株式会社は個別的な諸資本にとつては不可能であつたような生産業種や、企業を發展させ(例えば鐵道)、従前は政府企業であつたものを会社企業に転化させる。

(2) 株式会社は、私的企業に対立する形態を備えた社会会社企業として登場し、「これは資本制的生産様式そのものの限界内での私的所有としての資本の止揚である。」

(3) 株式会社は資本の所有と經營の分離をおしすすめるが、この事態は、資本が個々の生産者たちの私的所有と

してではなく、直接的に社会的な所有に再転化するための「必然的な通過点」である。<sup>8)</sup>

かくして株式会社制度は、「資本の貸手も充用者も、その所有者または生産者ではない」という状態を全く形式的にはあるがつくりだす。なぜ形式的か、といえば、資本主義社会にあつては、この状態を内容からみるならば、実は小資本の処分権が大資本にゆだねられたことを意味するにすぎないからである。

同様の事情は、銀行制度についても云いうる。マルクスはいう。

「銀行制度は、形式的な構造および集中の点からみれば……資本制的生産様式一般によつてもたらされる最も人為的で最も発達した産物である。だからこそ、イングランド銀行のような施設が、商業および産業の上に——後者の現実的運動はまったく前者の支配外にあり、また前者の後者にたいする関係は受動的であるにもかかわらず——巨大な権力を振うのである。なるほど銀行制度により、社会的な規模での生産手段の、一般的、簿記および配分の形態が与えられているが、しかし形態だけである。」「銀行業により、資本の配分は、私的資本家および高利貸の手から、一つの特殊の業務として、社会的機能として、引上げられている。」

銀行Ⅱ信用制度の発達は、私的な簿記ではなく、社会の簿記を、すなわち個々の資本家から銀行や株式会社にゆだねられた資本運動の簿記を提供する。この簿記は内容からみれば私的資本の利潤追及活動の記帳以外の何ものでもないが、形式だけからみれば、私的所有には属しない社会的な生産手段の分配という形をとつてあらわれる。しかも、中央銀行制度は、この簿記の総括者として、純粹に形式的で抽象的な可能性としてではあるが、経済の社会的管理の機能が国家の手に集中されることを意味する。例えば中央銀行の利率操作は、内容からみれば、「自由な私的資本の利潤追求」を援助する以外の何ものでもなく、「商業の秘密」を前提とした営利活動であるが、形態

だけは、高度に集中された經濟管理機能として現われる。簿記は本来、資本の運動を貨幣形態で「確定し」、<sup>11</sup>「統制する」ものであり、社会の簿記が一点に集中されることは、全社会の生産を統制する前提である。だが、資本主義の枠内では、結合資本家の發展は、大規模事業を國家の手から最終的に奪い取り、まさにそれによって全信用機構の生産過程からの相対的自立性を完成させ、管理的運営の反対物である投機を前進させる。

最後に、資本主義的生産様式の枠内での生産の社会的性格の部分的承認の一形態として私的企業に對立する形で、<sup>12</sup> 国有企業があらわれる。エンゲルスはいう。

「生産手段あるいは交易手段が現実、株式会社の管理の手におえないほどに成長し、したがって国有化が經濟的、<sup>13</sup> 避けられないものとなつたばあいだけ、国有化は、たとえ今日の國家がそれをおこなつても、一つの經濟的進歩を意味し、社会そのものによるいっさいの生産力の掌握への一つの新しい前段階に達したことを意味する……」<sup>10</sup>

ここで述べられている国有企業の意義は、基本的には株式会社と同一であつて、資本の集積・集中の形態の一つであり、資本主義の枠内での私的所有としての資本の止揚であり、きたるべき社会の物質的前提の形成であり、所有と經營の分離の一形態である。

国有企業の特種性は、國家そのものが、搾取者となる、ということである。

「近代國家がますます多くの生産力をひきついで自分の所有とすればするほど、それはますます現実の總資本家となり、ますます多くの國民を搾取するようになる。労働者はあいかわらず賃金労働者のままであり、プロレタリアのままである。資本關係は廢止されな<sup>14</sup>いで、むしろ極端にまでおしすすめられる。」<sup>11</sup>

資本主義的國家權力を前提とする限り、改良の一形態であり、生産の社会的性格の部分的承認の最高形態である



国有化すら、資本関係を極端にまでおしすすめる結果をもたらすのであって、この性質は、労働日の短縮のための立法や、都市計画や、信用制度一般についてもある程度はあてはまるのである。

四、以上の考察によって、資本主義的改良の性格をつぎのように要約することができよう。

(一) 機械制大工業の一般化、資本の集積、集中の横杆となる。

(二) 前資本主義的要素の掃蕩。

(三) 改良自身が階級闘争の反映でありながら擷取度が高まり、企業内の組織性と社会的生産の無政府性の間の矛盾を激化させる。

(四) 労働者の全人格の発展、土地の計画的利用、資本の私的所有としての性格の止揚、などのような、社会主義社会建設の物質的基礎をつくりだす。

〔注〕 軍隊、警察、不生産的階級の維持を基本的内容とするとはいへ、産業資本主義時代の予算制度は徴税機構と物件費や人件費の支出によって私人の手からはなれた貨幣の流れをつくり出し、国家収支のバランス、シートをつくりだす。予算が国民経済の一部分をつかんでいるにすぎないかぎりでは、この社会的簿記は極めて不完全なものに止まるのであるが、財務行政の集中と、社会的簿記の政府への集中は管理経済のイデオロギーが登壇する際の、一つの技術的前提である。

(1) K. Marx, *Das Kapital I*. Dietz Verlag, Berlin, 1953, S. 532. (邦訳「マルクス著、長谷部文雄訳、「資本論」青木文庫版、⑧八〇一ページ)

(2) *Ibid.*, SS. 512-513. (前掲書、七七四—七七五ページ)

(3) 「いむゆる家内労働のあらゆる取締りは、ただちに父権——すなわち近代的に解釈すれば親権——への干渉としてあらわれるのであって、……大工業は旧来の家族制度・およびそれに照応する家族労働・の経済的基礎とともに旧来の家族諸関係そのものを解体するということが認められた。」(*Ibid.*, S. 514. 前掲書、七七八ページ)

- (4) *Ibid.*, SS. 528-529. (前掲書、七九六—七九七ページ)
- (5) *Ibid.*, S. 531. (前掲書、八〇〇ページ)
- (6) F. Engels, *Herrn Eugens Dührings Umrissung der Wissenschaft*, Dietz Verlag Berlin, 1954, S. 368. (邦訳、前掲書、五〇八ページ)
- (7) K. Marx, *op. cit.*, S. 651. (フレンクス、前掲書、八五一ページ)
- (8) *Ibid.*, SS. 477-478. (前掲書、六二〇—六二二ページ)
- (9) *Ibid.*, SS. 654-655. (前掲書、⑩八五六—八五七ページ)
- (10) F. Engels, *op. cit.*, S. 344. (前掲書、四八三ページ)
- (11) *Ibid.*, S. 346. (前掲書、四八四ページ)

(未完)